

生活のことばと文化

著者	神部 宏泰
雑誌名	清心語文
号	5
ページ	1-10
発行年	2003-08
URL	http://id.nii.ac.jp/1560/00000318/

生活のことばと文化

神 部 宏 泰

はじめに

今回の研究集会は、沖縄の貴重な古典である『おもろさうし』についての研究会が28年も続き、ついに1000回に達したのを記念して開催された大会と聞いております。一口に1000回と申しますが、これはまことに輝かしい記録でありまして、他に、民間にあって、このように息の長い、熱心な研究会があることを知りません。これも、故仲曾根政善先生の卓越したご指導と、それに応える会員の皆様のご熱心な研究実践があったればこそであります。関係の皆様方に深い敬意を表しますと共に、本日、この大会でお話できますことを、光栄に存するしだいであります。仲曾根先生には直接ご教示を賜ったことはありませんが、『今婦仁方言辞典』など高著を通じて多大な学恩をいただいております。今日、先生のご郷里今婦仁（なきじん）でお話できますことは、まことに感慨深いものがございます。

さて、本日、私が掲げました話題は「生活のことばと文化」であります。大会の主題である『おもろさうし』が、すでに沖縄のすぐれた言語文化であることは多く申すまでもありません。したがってその研究がまた、沖縄の言語文化究明のための、一つの真摯なまた重要ないとなみであることもむろんであります。いわば「生活のことばと文化」を問題にする視座が、ここにも蔵存していると申せましょう。申すまでもなく、言語文化は生活の風土性や習慣性と密接に関わっています。ただ、沖縄の言語文化を支える風土や習慣の実際を問題にすることは、今の私にとってはいささか困難であります。ここではその基底にある一般的な諸問題について、いくらかのことをお話ししてみたいと思います。

一、風土と言語文化

1 風土とことば・風土と文化

人間の生活が、基本的には風土——自然や気候などによって大きく左右されることは改めて申すまでもありません。例えば高温で多湿な地域ですと、それにふさわしい植物がよく繁茂し、しぜん、その植生に基づいた採取や栽培の生活が中心になりましょう。また逆に、低温の地域であったり乾燥の地域であったりすれば、その風土や環境に適した生活が中心になりがちでしょう。それぞれの生活に適したことばが生まれ、個性的な文化が育ちます。このような事態を考えてみしても、風土と人間生活とのかかわりの大きいことを理解することができます。

同じ日本でも、沖縄のような温暖で多湿な地域と、北海道のような寒冷な地域とでは、また、生活の基盤もおのずと違ったものになるのは、ごくしぜんのことと思われる。

山間・高地の生活と海浜・平地の生活を比べてみましても同様です。私の郷里は広島
の奥地で、山間・高地の地域ですが、子どもの頃を思い返してみますと、例えば正月です
が、雪のない正月など、想像さえもつきませんでした。雑煮といえは丸餅で、鰯と蛤が
つきものです。故郷を離れた今でも、正月は鰯と蛤の雑煮で祝っています。これでない
と、新しい年を迎えた気分になれません。沖縄の正月とは、一味違っておりましょう。

ことばも、基本的には、生活の必然が生みだしたものとと言えます。つまり地域地域の
生活特性に応じて、その地域のことば——方言が生まれてきます。言いかえますと、方
言も、風土や生活と深くかかわって成り立っているわけです。この点については、後で
もう少し詳しく述べるつもりです。

2 沖縄の自然とことば

沖縄ははじめての旅ですが、何よりも印象深かったのは緑の濃さです。那覇の首里城
跡、北への高速道に沿った山やま、今帰仁の風景、すべて緑です。その緑が海の藍と交
わり、やがて空の青に溶けこんでいきます。今日でもそうですが、日本では古来、緑も
藍も青も、ひとしなみに「あを」として把握し、認識してきました。その「青」の世界
が、山・海・空を覆う区別のない色彩の世界であった古代人の感覚を、私は今、沖縄の
自然に接するにあたって、感深く実感することができたように思います。

ことばと宇宙認識との関係については、「サピア・ウォーフの仮説」が有名です。これ
を簡単に紹介しますと、人間というものは、各自が持っていることばによってしか、外
界を認識できないものだ——という学説です。この学説に従って先の「青」という色名
に立ち返ってみますと、古代日本語人の「青」による宇宙認識の広大さが偲ばれ、その
内部の細かい色の差異の識別には関心がなかったということになります。ただ、「青」の
観念と語の形成には、外界の環境が大きくかかわっていたであろうことも否定できませ
ん。その外界環境とは、今、目のあたりにする沖縄の景観に、さも類似していたであろ
うことを、今、強く実感しています。

日本語の「基本色名」に「青」と共に「赤」があります。柴田武氏はこの語源につい
て、「隠すものをとり去って何も無い明るさ」を意味すると説明しておられます（『日本
語を考える』）。別に、朝日・夕日の色と、これによって赤く染まった空の色に関係があ
るかという説もあります。今日でも、太陽を赤とイメージするのは日本人共通の観念で
しょう。ちなみに沖縄では、「卵の黄身」（アーミ＜アカミ）や「菜の花」の色は、もと
「赤」の部類に属したものと柴田氏は説明しておられます。沖縄の「青」と「赤」の世
界。いかがでしょうか。

いずれにしても、沖縄の自然に接していると、日本の生活文化・言語文化の原
郷が見えてくる思いがいたします。

3 自然と生活——農耕と生活共同体

日本列島は、幸い自然に恵まれています。豊かな自然を生きた日本人は、本来当然な
がら自然に対する関心が深く、これが日本の生活文化・言語文化の重要な基層となっ
ています。自然と文化とのかかわりについて、金田一春彦氏があげておられる例の一つお

借りしましょう。例えば「月」ですが、これは日本では「三日月」「おぼろ月夜」「十五夜」「名月」などと、情趣を催す重要な語となっています。ところが英語系の人たちは、「月」と言えばまず「探険」ということを連想するのだそうです。虫の声にしても、日本では「松虫」「鈴虫」「こおろぎ」などと、情趣深いものとしてとらえられていますが、向こうの人たちにはこれが雑音と同じように聞こえるというのです（『日本語（上）』）。

9月17日（1995年）付の朝日新聞「天声人語」欄に、次のような記事が見られます。

きのう届いた一通の手紙は、気持ちを静めてくれる。手術のあと、少しずつ働きながら回復に努めている女性の読者からで、最初に花の名前が並ぶ。

＜桔梗、竜胆、松虫草、田村草、萩、葛、吾亦紅、釣鐘草、(本名は釣鐘人参ですが、幼いころからなじんだ名を)、藤袴、草牡丹＞いまの季節の花の色は、紫を秘めたものが多いような気がします。知性の青と情熱の赤から生まれる落ち着いた色。豊かな秋への、小さな前奏曲なのでしょうか。(略)

重い病から帰ってきた人の、ゆっくりと自然に向き合う姿を感じる。台風が去ったあと、花々の無事をぜひ見たい。

自然のなかに安らぎを求めている一人の人間の姿を、ここにも見いだすことができます。四季折々の自然が、日本人の生活と文化に、豊かな潤いをもたらし続けてきたことは、以上の諸例によってもはっきりと思い返すことができます。ここにも先に述べた「青」と「赤」が語られています。

さて、自然が豊潤であれば、植物も繁茂し、農耕の生活も始まります。その農耕の原初形態や推移の経緯はおくとして、農耕生活となれば、狩猟や牧畜の生活と違って、一定の土地に定住しなければなりません。そうやって、集団生活、共同生活が一般化してくるのはしぜんの成りゆきでしょう。農耕を中心とする集団社会にとってもっとも深刻な関心事と言えば、農作物の豊かな稔りでしょうか。もとより一家の息災や子孫の繁栄も重要な関心事には違いありませんが、これらを含めて、集団生活を潤す幸せの根底に、豊饒な収穫への期待があることは否めません。とすれば、その豊饒を願い、収穫に感謝する、いわば「祈り」が、人びとの生活や文化の、精神的な基底を形成するようになるのは、生の必然として首肯されます。

4 生活共同体を支える祈りの文化

農耕が始まると、人びとは、しだいに、その稔りを保障するものが、人間の労働を越えたところにあることを悟り、信じるようになります。作物の生育や稔りが、天候や気候などに大きく影響されるのは今日でも同様ですが、特に古代にあっては自然の力を畏怖する気持ちが強く、ここに「神」の概念とその信仰が生まれたものとされています。作物の出来を左右する太陽にも、神の資格が与えられ、祈りや信仰の対象となってきたことは、先刻ご承知のとおりです。

先ほど、広島奥地と言って紹介した私の郷里の村の生活を思い返してみますと、田んぼには田の神、井戸や池には水の神、住居には家の神、火の神、かまどの神と、至るところに神が鎮座していました。私はそういう神がみへのしぜんの恐れと祈りの中で、子どもの時代を過ごしたように思います。こうした神がみとの共生も、日本の伝統的な

生活形態となってしまうのか。沖縄も神と祈りの国と聞いていますが、神がみへの心が、地域地域で、祈りの形態や様式を育てていくのは、これまた当然のことかと思えます。総じて、日本の生活文化の基底にあるものが、「祈り」であるとみることは、間違いないものと考えられます。

祈りは人間愛に通じるものでしょうか。人の幸せを願うのが祈りの心でしょうか。その観点からすれば、「祈りの生活文化」は「人間愛の生活文化」と言えるかも知れません。

本日の研究主題になっている『おもろさうし』の「おもろ」は、外間守善氏によりますと、「思い」であると説明されています（『沖縄の言語史』）。しかもその「思い」は、単なる内的思考の「思い」ではなく、繁栄や豊穡を願う共同体の心を、神に宣り、唱えるという意味のものとされています。このお説は、私にとっても刺激的でした。とすれば、「おもろ」の数かずの歌は、祈りの表現であり祈りの言語文化であると言ってもいいのではないかと、今は思っています。

ここで思い合わせられるのは、八丈青ヶ島の別れの挨拶ことばです。藤原与一氏は、売られていく牛との別れを綴った中学生の作文に、「私の牛さんもうわよ（さようなら）。」とあったことと共に、「長い別離に際しての、切々の訣辞である」という同島出身者の説明を紹介していられます。九州薩摩の上甕島にもこれに類する挨拶ことばがあるようで、藤原氏は「京阪に出稼ぎに行く娘を送る母は、「オンメュー ヨー。」と叫んで、別れがたい心を託す」という、上村孝二氏の話も合わせて紹介していられます（『愛心愛語抄』）。

このような「思う」の挨拶は、単に「忘れないよ」とか「忘れないでね」という意味だけでなく、本来は、相手の息災を神に宣る、深い「祈り」のことばであったのかも知れません。大海原の中の八丈青ヶ島、上甕島の位置は、また沖縄にも通じるところがありましょう。日本語の「思い」の原風景を、ここにも見る思いがいたします。

二、方言社会の形成と特性

1 方言社会の形成とその要因

農耕を中心とした生活共同体の形成についてはすでにお話ししましたが、その集団を、古く、「ムラ」あるいは「シマ」と言ったことは、周知のとおりです。「ムラ」は「群れ」が語源とされていますが、沖縄では古来「ムラ」よりは「シマ」と言うのが普通であったようです。「シマ」は注連縄などの「シメ」からきているという説もありますが、はったりしません。ただ、これが、小地域を示す日本の古い伝統的な言いかたであったことは間違いないようです。古代、大和の宮廷のあるところを「秋津シマ」と言ったことはよく知られていましょう。現代のように、海や川など、水に囲まれた地域を限定的に「シマ」と言うようになったのは、後の時代のこととされています。沖縄では、その、集団や地域の古い呼びかたがそのまま用いられているわけで、ここでも日本語の伝統的な姿を留めているということになります。

ちなみに、「秋津シマ」の「秋津」は「とんぼ」を指しますが、沖縄では現在でもとん

ばのことを「アキズ」とか「アケージュ」などのように言っているようで、これは皆さんがよくご存知のとおりです。とんぼのことを「秋津」系で言うところは、別に、東北の方にもあり、例えば岩手・秋田他でも「アキズ」「アケズ」「アケージュ」などと言っています（『日本の方言地図』）。奈良朝の昔、大和地方に行われていたことばが、今日、その大和からは遠く離れた南の沖縄と北の東北とに残存しているわけです。これは、ことばが中央から四周の地方へ、水紋が広がるように分布した結果で、このような分布のしかたを、学界では「周囲分布」と呼んでいます。永い年月をかけての周辺への推移・伝播の実態を、私どもは、今、現前に、興味深く確認することができます。

さて、先に述べました生活共同体に、当然ながら生活のことばが生まれます。生活共同体（沖縄で言えば「シマ」ですが）の存する地域の特殊性に即して、その生活に根ざしたことばが育ちます。これが方言です。先にも、風土や生活の違いに基づく方言の成り立ちについて、いささかふれるところがありました。ここで改めて方言の成立について考えてみたいと思います。

地域に根づく生活の違いは、基本的には人の行き来が自由でないところからきていましょう。それは、主として自然地理的条件および歴史的条件に基づいています。自然地理的条件については、先にも風土ということでもいくらかの例をあげましたが、この面ですらに具体的に見ていきますと、例えば山脈や海洋ですが、これなどは人の往来を阻害し、集落を隔てたり、孤立させたりすることがありがちでしょう。沖縄諸島などは、海によって本土ともまた各島じまとも隔てられていて、孤立しやすい自然地理的条件を備えています。その上に、気候・風土の面でも本土とはかなり違っています。方言がきわめて特殊性に富んでいるのも、当然のことかと首肯されます。一方の歴史的条件については、例えば昔の封建時代の、国と国、地域と地域との通交の制約などがあげられます。沖縄は、琉球王国として永く独立の政治形態をとってきた歴史的事情もあります。このような歴史的事態が、人びとの、より広い地域との自由な通交を阻んだとすれば、しぜん、地域や方言は、他とのかかわりを薄めて、独自色を帯びやすくなります。

方言の形成について以上のように見てきますと、その方言の存する社会——方言社会の基本的な性格が、閉鎖的で伝承的であることをよく理解できると思います。今、方言そのものに焦点をあててみしても、方言の違いや特殊性の生まれる根本のところ、地域や生活の独自性に関係があることは申すまでもありません。先に沖縄の地理的・歴史的事情についてふれましたが、島じまの内部にあっても、地域による方言の違いをさまざまに見いだすことができます。これも基本的には人の交流の薄さと、それに伴う地域地域の生活の孤立性・閉鎖性に基づいていることは、以上に申したとおりです。

地域が閉鎖的であれば、その地域内での住民の生活交流は、あたかも大家族のようにいっそう密なものになりましょう。ここに育まれた方言が、人びとの心と生活を支える命のことばであることは、改めて申すまでもありません。地域社会の生活と文化は、方言によって支えられていると言って過言ではありません。

2 地域社会言語としての日本語の特性

世界的な視野から見ますと、日本語も、日本という一地域社会のことばということが

できるかも知れません。日本という地域社会は、言うまでもなく基本的には農耕社会です。農耕を中心とした生活共同体です。先に申したムラ（シマ）の社会です。ムラ社会は、ある意味では運命共同体と言うこともできましょう。ムラ全体の和や秩序が何よりも優先される社会だからです。全体あつての個人なのです。個人よりも全体を立てる。個人の立場や権利を主張することはひかえ、全体の成りゆきに従う。これがムラ社会の道徳律です。このような社会の特性に支えられているのが日本語です。

日本語は、したがって、基本的に受動的な言語、受け身の言語と言われてきました。社会や場に依存し、「流れのまにまに」というのが日本語の性格です。言いかえますと、周囲と和合し一体化して、自然の流れに沿うのが日本語のいきかたです。例えば「山が見える」「音が聞こえる」というように、実際には意志的な行為の「見る」「聞く」であっても、しぜんに目や耳に入ったようなことばづくりにするのが日本語です。「私たちは結婚します。」と言うよりも「私たちは結婚することになりました。」と言う方が、日本語としてはしぜんで穏やかでしょう（荒木博之『やまとことばの人類学』）。このようにしぜんや成りゆきにゆだねた言いかたをして、話し手本人の意志を際立たせないようにするのが、日本語の本質なのです。

3 日本語の論理

日本語は非論理的だと言われることがあります。このような感想を持つ人は、外国の人たちばかりとは限りません。たしかに欧米系などのことばに比べれば、そのように言うことのできる一面はあります。向こうの社会は、日本とは対照的で、伝統的に個人中心の社会です。個人の権利を重視した契約社会です。このような社会と共に育ったことばは、理を立て、権利や利害を主張するのに適しています。それに対して日本語は、先にも述べましたとおり自然に即した受身のことばです。すすんで理を立て筋を正して、主張したり説得したりするのには不向きです。それができないというわけではありませんが。それどころか「沈黙は金」と言って、黙して多くを語らないことを徳とさえしています。以心伝心、黙っていてもしぜんに分かってしまうのが日本語の世界です。この点から言えば、日本語は感覚的で情感的です。向こうが客観的なのに対して、こちらは主観的と言えるかも知れません。

このことで、森田良行氏の例を一つお借りしましょう。飛行機の旅で那覇空港に近づきますと、機内で「まもなく那覇空港に着陸します。」とアナウンスします。別に、「飛行機が」とも「われわれは」とも言っていません。言わなくても何があるいは誰が空港に着くのか、状況や場面で分かります。ところが英語ではこうはいきません。いちいち「われわれは」のように主語をつけて言わなければ客観や論理の表現として成り立たないのです（『日本語の視点』）。

それにしても、日本語には日本語の論理があることは言うまでもありません。ただ、その論理が、欧米のことばの論理と性格を異にしているだけなのです。

4 方言社会の内在律

しばらく日本語全体の基本的な性格について見てきましたので、ここで問題をしばっ

て、小地域の方言社会に内在する言語法則について取りあげることにしましょう。一例として、人間の性向に関する語彙の世界を問題にします。注意したいのは、この世界では下向きの人間性、非難するべき人間性を表す語彙が豊富なことです。「短気者」「道楽者」「乱暴者」「ひねくれ者」「出しゃばり」「おしゃべり」「横柄な人間」などに関する語彙がそれです。それに対して、「真面目」「辛抱人」「綺麗好き」など上向きの人間性を表す語彙はごくわずかなのです。私が日本海の隠岐諸島の方言について調べた結果で申しますと、下向きの語彙が85パーセントを占めていました。このような数値は、隠岐方言に限らず、日本語方言の世界に広く認められることのようにです（藤原与一「西部方言の語彙—中国・四国」『方言学講座三』）。ここには、地域の秩序や道徳に反する人間を厳しく見つめる、伝統的な社会の道徳律が認められましょう。集団の秩序に適う人間行為は当然のこととして、これに反する人間への非難の意識が強く、これが関係語彙を増やすことになったのです。これが日本語のしぜんの論理です。言いかえますと、社会を立て、社会に依って自己の立場をはかるのが日本語のいきかたなのです。日常の表現行動ともなれば、その「社会」を「場」と置きかえてもよからうかと思います。

三、方言と生活語

1 方言とその特性

これまでも述べてきましたが、「方言」とは、単純に言えば地方・地域の言語ということです。地域社会の風土や生活に即して生まれ、育ってきたことばです。ところが、「方言」と言えば、どうも蔑視の対象になりがちです。地域のことばということで、とかく中央のことば、すなわち共通語と対比されるからでしょう。方言の話し手もまた、自分の属する集団社会の外では、卑下して劣等感を持ったりしています。ここに、中央は勝れたもの、地方・地域は劣ったものという誤った観念が内在していることは否定できません。共通語であろうと方言であろうと、ことばに優劣の別はありません。それぞれが、それぞれの属する集団社会で、重要な役割りを果たしているのです。そして、共通語も方言も、その総体が日本語であることは改めて申すまでもありません。それどころか、方言に、共通語に見られない細やかな情意表現の認められることも、よく知られている事実です。ただ、方言はあくまでも地域のことばであって、共通語のように全国にわたって行われるということはありません。ここが卑下の根源になっているのでしょうか。広く行われなくても、地域に生きる重要なことばであることは、またそれが方言の価値であることは、これまでも再三ふれてきたとおりです。

2 方言の生活語認識

方言が、仮に蔑視の対象になったり、劣等感を抱かせたりしたとしても、その方言によって生きてきた人びとにとっては、生活や生命を支える糧そのものでありまして、簡単に捨てたり避けたりすることができません。再三申してきましたように、方言に生きる人びとは、その方言によって人間性を培ってきたわけですから。それにまた、特定の方言社会に生を受けたこと自体、全く本人の意志でも何でもないわけです。

このような、方言と人間との関係を考えると、人間の立場からする方言把握という観点がぜひとも必要となってきます。「方言」という観点は、その性格から、他の地域の方言や国の中央語との比較に関心が向きがちです。比較して、実質の乏しい劣等感や優越感を抱きがちです。他との比較の意識ということではなくて、話し手自身の立場から、当該方言社会の立場から、純粹に方言を問題にすることが重要です。このような立場からする方言把握を藤原与一氏は「生活語」と呼んでいられます（『方言学』他）。人間にとって方言とは何なのか。人びとはどういう生活の思いを方言に託してきたのか。方言によって、人びとは何を語り、何を訴えてきたのか。方言に込められた人びとの生命や願いを、その人びとの側から純粹に取りあげ、問題にするのが「生活語」認識の立場であり、精神であるとされています。方言に生きる人びとが、自分たちの生活のことばを、情愛をもって語ることのできる、そういう人間の温もりの認められるものが生活語の世界であると言ってもよからうかと思えます。

かつて政府は、戦前の一時期、かなり厳しく「方言撲滅」政策を打ちだしたことがあります。方言を撲滅して、共通語・普通語にとって代わらせようという政策です。そのために、中央からも遠くて独自色の濃い方言社会では、その方言を放棄するために大へんな苦痛をしいられたわけです。沖縄もそういう地域の一つで、方言矯正のために用いられた「方言札」という罰札のことはよく知られていましょう。「方言札」による過激な矯正は、何も沖縄に限ったことではありませんが、それにしても独自色の強い沖縄方言の世界では、その苦痛がいっそう大きかったものと察しられます。かつて平山良明氏が、この問題について実態調査をされていますが、その報告書に、方言札に苦しんだ人たちの体験記が掲載されています。その一部を掲げましょう。

- 方言札を渡されたとき罪悪感で体中ガタガタにふるえあがり、方言札を手を持っているうちは、学習も手につかず、恐さでいっぱいだった。
- 当時を思い出す時、方言札のため親同士のひどいいがみ合いも絶えなかったのも、教育ということばとはほど遠いものだったような気がしている。仲のよい友達も方言札のために壊れた。
- 小学校のとき、からだが小さく内気でしたので、自分の背より大きい方言札をさげて歩くのが大へんでした。他の人に渡す勇気も持たず、毎日毎日掃除当番でした。
- 方言は大事な沖縄の文化だからぜひ子供達にも教えて、方言が話せるようになってほしいと常々思っている。

これは一部に過ぎませんが、このような手記によっても、方言札の持っていた問題の深さの一端がうかがわれましょう。沖縄のことばが減びると、そのことばが支えていた沖縄の文化や芸能も減びると、真剣に憂い、訴えています。

共通語が話せるようになることは、もとより歓迎するべきことに違いありません。が、それが、方言と引き替えにというのが問題なのです。方言生活には方言生活の重要な側面のあることは、すでに述べてきたとおりです。むしろ方言生活そのものを基盤に据え、現在や将来の言語生活の在りかたについて、教育の手を入れることが大切だと思うのです。そういう方言教育、生活語教育のなかから、発展的に共通語教育の問題が出てくるのが望ましいのです。外から一方的に押しつけられるかたちの共通語教育では、人間

やその心がおいてけぼりにされてしまいます。内面から育つ、内面から発展する共通語教育の在りかたが追求されなくてはなりません。ここに「生活語」の思想が重要になってきます。

3 人間存在と生活語

「生活語」が人間存在という視点からの把握であることはこれまでも述べてきました。方言の否定、生活語の否定が、人間の否定、文化の否定につながることは、多く申すまでもありません。沖縄の人と生活と文化を支えているのは沖縄語であることを、私どもは忘れてはならないと思います。

四、生活語の発展—生活語文化の創造へ—

1 生活語の世界

先に、生活語について、人間の情愛や温もりのある世界と申しました。まさに生活語の世界は、そういう人間の生命の満ちた世界なのです。人間の真実の輝く世界と言ってもよからうかと思います。ここには、共通語や普通語に認められない、人間の自然と深さがあります。

人というものは、故郷を離れてどこで生活していても、その心や考えかたは、つねに母語——母なる生活語から離れることはできません。繰り返し述べてきましたように、人は、生まれ落ちて以来、生活語によって生き、人間として立ち得ているのです。それはちょうど、人がどこに居ようと、どんなに年齢を重ねていようと、つねに両親や家族を思う心を離れることができないのに似ております。心の原点、考えかたの原点、そして折おりのことばの生活の原点は、故郷の方言の世界、生活語の世界にあることを指摘しなければなりません。そういう原点を持たない人やその生活がどんなに索漠たるものであるか、私どもの想像をはるかに越えるものがあるように思われます。

沖縄の生活語が、沖縄の人と生活と文化の源泉であることは、先にも述べたとおりです。さらに申しますと、それは、単に沖縄に留まらず、広く、日本語・日本文化の原点に大きくかかわっていると考えられます。

2 文化を育む精神とことば

文化は、人びとの生きた精神活動によって、精神活動に支えられたことばの働きによって創りだされるものです。借りものことば、外から押しつけられたことばには、文化を創りだす伝統的な精神も活力もありません。真実のことばの生活、これが文化創造の源泉と考えられます。

8月13日のNHKの番組で、「沖縄わらべうたの会」の活動が紹介されました。「わらべうたに祈りを」という副題がついていたかも知れませんが、話題の主として登場した又吉さんは、現在は本土（大和）に住んでいます。久しぶりに沖縄の故郷に帰り、小川に手を浸して、「昔の流れの音だ」と言って懐かしんでいました。そのお気持ちがよくわかり、私も思わずその番組に引き込まれたしだいでした。

このことを発展的に考えてみますと、小川の水音は昔の音であると同時に現在の音でもあります。また、未来にも続く音でもあります。方言や生活語も伝統を生きぬき、また現在を生きていることばです。そして未来へと展開するであろう人間のことばです。「撲滅」してよいはずがありません。今日では、昔の一頃とは逆に、方言を残そうという気運や運動が各地にあります。これは確かに結構なことと言うべきでしょう。ただ、方言は古くて珍しいから、あるいは減びようとしているから保存しようというのではどうかと思います。それでは文化財として博物館にでも飾っておこうというのと大した違いはありません。そうではなく、方言には、祖先の人びとの生きざまが、あるいは生活の息づかいが見いだされるから重要なのです。祖先はこの方言の世界にどう生きたのか。そして、その生きざまが今日の私どもの生きかたとどうかかわり、どう問題を提起しているのか。さらに、これからの方言生活・言語生活をどう展開していくのが本統なのか。そういう精神の努力のありようを示唆しているからこそ重要なのではないのでしょうか。

もとより方言は、時代と共に、あるいは生活の進展と共に変化していきます。ただその変化は、あくまでも社会や生活の変化の流れに従う、方言生活の史的進展に応じた、いわば人びとが望んで生じた、内発的な変化であるべきでしょう。言いかえますと、人びとの生活の必要性が生みだした変化であることが重要なのです。外からの新語の受け入れも、当該方言社会の、あるいはこの社会に生活する人びとの、しぜんの意志によることが、改めて確認されなければなりません。

総じて申しますと、祖先の残したことばや文化に生きることによって、その湛えている深さの中に、新しいことばの生活や文化の在りかたを見いだしていくことが、方言生活・言語生活発展のために大事なことではないかと思われます。

3 ことばの生活の発展

ことばの生活の発展のために、今、重要なことは、まず自らの生活語を慈しむことではないのでしょうか。そして、そのことばをよく知ることです。よく知って、自分の生活語を耕すことが、これからの方言生活の発展と、新しい文化の創造につながる、根源的な営みであることを、改めて認識する必要があるかと思います。

最後になりました。『おもろさうし』研究会のいっそうのご発展と、沖縄の皆さんのご繁栄を心から祈念して、私の話しを終わらせていただきます。

<付記>

本稿は、去る1995年9月23日、沖縄・今帰仁文化センターで、『おもろさうし』研究会1000回記念大会において行った講演の原稿に加筆したものです。